# 女性教職員活躍推進だより

第2号　令和4年7月14日　教育庁職員課

☆★　女性管理職ロールモデル紹介　☆★

福島県教育庁義務教育課長

## 石幡　良子さん

職員課主幹兼副課長高橋敏幸が話を伺いました。

**Q:これまでの経歴を教えてください。**

小学校教諭として１８年間勤務し、平成１８年に教頭昇任試験を受験しました。平成１９年度から３年間、古殿町立大久田小学校教頭として勤務し、平成２２年度からは、教育庁学校生活健康課（現在の健康教育課）指導主事として３年間勤務しました。その後、校長に昇任し、２年間の白河市立五箇小学校の勤務を経て、平成２７年度から、義務教育課管理主事、主任管理主事、管理主幹として４年間勤務しました。県中教育事務所長として２年間勤めた後、令和３年度から現職として勤務しています。

**Q:教頭昇任試験を受けるきっかけは？**

校長先生が背中を押してくれたことが大きなきっかけです。「これからは、女性も当たり前のように管理職として活躍すべきであり、女性の視点を生かした学校経営も大切である。」一度ならず、二度、三度と背中を押してもらえたことが、今の私の出発点です。

**Q:管理職としてのロールモデルとなる方はいらっしゃいましたか？**

いました。明るく、温かく、気遣いができ、誰にでも公平に声をかけ、適切な指導・助言ができる女性校長と出会いました。そばにいるだけで包み込まれるような包容力がありました。家事と仕事の両立については、「一人で頑張りすぎないことが大事！困った時には、声に出して誰かに助けを求めることが両立のポイント。」と言われました。対話と協働を常に大事にする憧れの女性校長でした。

**Q:教頭時代に家庭と仕事の両立で工夫した点はありますか。**

私は教頭時代、３年間単身赴任を経験しました。夫と３人の子どもたちと離れての生活が３年間続きました。家族みんながストレスを感じず、不満をためないことが何より大事だと考え、週末、家に戻ってきた時には、必ず「家族会議」を行い、それぞれの思いを話し合いました。家族だからこそ分かり合えるのではなく、家族だからこそ、我慢せず、不満や感謝の気持ちを言葉に出して伝え合うことが何より大事だと感じた３年間でした。

**Q：教頭のやりがいは？**

何と言っても、学校経営に校長の補佐役として参画できることだと思います。教頭は情報収集の窓口として、いろんな方の話を聞きます。一人一人の教職員の思いや考え、児童生徒や保護者、地域住民の願いを受け止め、マネジメントできることは管理職だからこそできることです。

**Q：逆に大変だったことは？**

正直、大変というより楽しかった思い出の方が多いです。大変だったことを敢えて一つあげるとすれば、冬の早朝の雪かきくらいですかね。

**Q：最後に、女性教職員の皆さんにひとこと。**

私は、これからの管理職は、「強さ」ではなく「しなやかさ」が必要なのではないかと思っています。私が思う「しなやかさ」とは、リーダーとしての自分の意見・考えはしっかり持ちながらも、まわりの人たちの意見や考えにも耳を傾け、力を合わせて協力しながら前へ進んでいく姿です。

私は、現在も、今までも、たくさんの人たちに支えられ、助けてもらいながら管理職として勤めてきました。これからも、困った時には助けを求め、協力を仰ぎながら進んでいくつもりです。これから管理職を目指す人たちにも、一人だけでがんばるリーダーになるのではなく、「対話と協働」を大事にするしなやかなリーダーになってほしいと心から願っています。

石幡良子さん、貴重なお話、
大変ありがとうございました！

次回は、福島県教育庁特別支援教育課主幹兼副課長齋藤成子さんから話を聞く予定です。

今後も、福島県で働く女性教職員の活躍を伝えていきたいと思います。よろしくお願いします。

**～女性教職員活躍推進だよりの発行に当たって～**

福島県教育委員会は、女性が職場においてその力を発揮できるよう、「女性教職員活躍推進プラン」を策定し、教職員のニーズに即した女性活躍のための対策を計画的に推進します。また、男女共同参画の実現に向けて、人事の公平性・公正性を確保しつつ、女性教職員の管理職への登用に努めることで、令和７年度までに、女性管理職の割合を教頭・副校長で１５％、校長で１３％とすることを目標としています。